■ 投下直後

昭和２０年８月６日、８時１５分、私は爆心地から約２キロメートル離れた場所にいました。広島市皆実町１丁目、路面電車の宇品線沿いにあった祖父母宅で、祖父と３歳の従兄弟とともに家屋の下敷きになりました。

私は８月１日に満８歳を迎えたばかりの国民小学校の２年生でした。その日は登校日で、２年生は小学校ではなく近くのお寺へ登校していました。

朝、母が私の髪を三つ編みにして外地に出征していた父から送られた布をリボンにして結んでくれていました。目立つリボンをしていたせいか登校してすぐそのリボンをいたずらっ子に取られ、大切なリボンを取り返したくて学校から５０メートルほど離れた祖父母宅へ向かい、 泣きじゃくりながら「おじいちゃん、私のリボン取り返して！」と言うと、カンカン帽を洗っていた祖父が「 よしよし、この帽子を洗ったら行くけんね」 と応えてくれたその瞬間でした。ピカっと光り、居間の天井は爆風で 大穴があき、そこからきれいな青空が見えた瞬間、家屋の下敷きになり気を失ってしまいました。

後で聞くところによると、朝登校した寺小屋にいた先生、児童はほぼ全員死亡と聞きました。道路を歩いていても即死です。ちょうど屋内にいた私たちは、東側にあった家の屋根が遮蔽物となったこともあり助かりました。

■ 逃げる途中

気を失った私は「 清子さ～ん、清子さ～ん」 と名前を呼ぶ声で目を覚ましました。目の前にはガラスが刺さり顔中血だらけになった祖父。驚く間も無く祖父は「急いで逃げんと！」と無事だった従兄弟と私の手を取りました。逃げる前に、祖父は大切なものを取りに倒壊した建物へと向かおうとしたのですが、「おじいちゃ～ん、火が近いよ～」という私の声で、孫二人の手だけ引いて、市外の祖母の実家へと逃げ出しました。

＜路面電車＞
家から数メートルしか離れていない宇品線上には、1台の真っ黒に焼けただれた窓枠もない電車が止まっていて、降車口には乗客の方だったのでしょうか、真っ黒になったご遺体が見えました。 その電車道を渡って歩いていると、大きな布を下げてとぼとぼ歩いてくる人がいて、よく見ると、上半身の皮膚がむけてぶら下がっていて赤い肌が

見えていました。 あの炎天下をあの状態でどうして歩くことができるのか、例えようのない光景でした。
少し歩いていると、鶴見橋の近くに大八車４～５台と弁当箱が散乱しているのが目に留まり、「これをお借りして行こう！早う乗りんさい」と祖父が言い、私は従兄弟と一緒に大八車に乗り込みました。

＜兵隊さん＞
やがて、大きな道路に差し掛かったとき、「おーい、この中にまだ昼を食べとらん者はおるか？」の声がしたので私は思わず「は～い」と大きな声で手を上げました。
他にもたくさんの方々が手を上げていらっしゃいましたが、その方はすぐ私どもの所へ走りより「これは、私が軍隊からもろうた昼食です。3人で食べてください」と小袋に入った乾パンをくださいました。

「 私はすぐ軍に帰らんといけんので、この子供たちを無事避難させてやってください。お願いします」と祖父に、私たち孫2人には「 おじいさんの言うことをよう聞いて、頑張るんだぞ」 と言って祖父に向かって最敬礼され、足早に去って行かれました。私は大八車を降りておじいさんと一緒に「 ありがとうございます。ありがとうございます」と言ってぼろぼろ涙を流し、何回も何回も遠の

く兵隊さんの後ろ姿に手を合わせてお辞儀をしていました。

＜水飲み場＞

その後、喉の渇きを覚えたので近くの小学校の水飲み場に行きましたが、 100人とも200人ともわからない大勢の人たちが校門入ってすぐの場所に横たわっていました。水飲み場に行く途中の数十メートルの間には大火傷で人間とは思えない被曝者の方でいっぱいで、「 お嬢ちゃんお水ちょうだい。お水ちょうだい」 と私の足首につかまり動くことができないほどでした。「 待っとってね、今お水持ってくるけんね」 と水道口まで行ったものの、水道管が破裂していて一滴も出ません。周りでは「 水は飲ませるな。すぐ死ぬけん！」 との大声も聞こえていましたが、それでも水を求め続けていたあの方々の思いに応えられなかったことはとても辛いことでした。

私たちも避難先に着くまで水を飲んだ記憶がありません。蓮畑で蓮の葉に乗っていた水滴を口に含んだような曖昧な記憶がありますが、幻想だったかもしれません。ただ、大きな蓮の葉を祖父が日傘の代わりに持たせてくれたことは確かで、涼しさと嬉しさでほっとしたことが思い出されます。

■ 避難後

＜祖母の実家で再会＞

「清子さーん、着いたぞ」と祖父に起こされたときは、日もとっぷり暮れた真夜中でした。 目が覚めるまで祖父の引く大八車に何時間乗っていたのかわからないのですが、広島市外の祖母の実家には、先に着いていた母や妹もいて抱き合って再会を喜びました。母の顔にはガラスの破片があちこち刺さっており、顔中が膨れていて誰だか見分けがつかない状態でした。

＜蔵のなかで＞

行方不明だった祖母と叔母は数日経ってから見つかりました。二人を探していた親戚が収容先の似島からやっと見つけ会うことができましたが、 祖母の実家の母屋は、市内に住む親戚たちの避難所となっており、すでに火傷や怪我人でいっぱい。私たちは蔵の中で寝ることになりました。 祖母と叔母は大火傷を負っており、その焼け爛れた皮膚にハエが来て卵を産み、蜂の巣上の皮膚からはウジ虫が出たり入ったりしていました。それを私と妹が毎日箸でつまんで取り出すのが日課となりました。

その後、祖母は回復することもなく、8月15日終戦の日に亡くなりました。一方、回復は難しいと言われていた叔母は回復し、92歳でこの世を去りました。

戦時中とはいえ、非戦闘員であった広島市民は、学校に行ったり、仕事に出たり、日常を送っていました。その人々の日常が一瞬で消えました。祖母の実家近くの小学校は被曝者の収容所となり、校庭に亡くなられた方々が井の字に高く重ねられ、そこには毎日のように火がつけられていました。「○○時から火葬するので、早く夕食を済ませて合掌してください」という町内放送に合掌する日々でした。
その後も祖母の実家で暮らしていましたが、食料が不足してきたということで、皆実町二丁目にあった我が家へ母と妹と一緒に帰って生活することになりました。到着したのが夕暮れ時で、疲れていた私はすぐに横になり寝入ってしまいました。目が覚め、ふと居間の天井を見上げると大きな穴が空いているのに気づきました。屋根がないという大変な状況だったのですが、そこから無数の星がキラキラと宝石のように美しく輝いていて、その輝きが明日への希望の光のようで、なぜだかホッとした気持ちになったことを昨日のことのように思い出します。
海軍で南方へ出征していた父は、原爆投下の約2ヶ月前の6月9日に、すでに戦死していたことを終戦後しばらくして知りました。

あの8月6日の原爆投下の朝、父から送られてきたリボンを髪につけていき、泣かされ、おじいさんの家に行ったことで奇跡的に生き延びられたのは、きっと父が守って、助けてくれたんだと、深い感謝の思いを持ち続け、これまで生きて参りました。

あの日、ぽっかり空いた屋根に輝き広がる「希望の星」のように、この地球という星が永遠に美しく輝き続けることを切に願い、私の話を終わらせていただきます。